山根立庵初期詩注釈

入谷仙介

山根立庵とその詩文集

本稿は山根立庵（一八六一―一九一一）の詩集のうち、清国渡航以前のもっとも初期のもの一〇首に注を附し、詩意を釈する。下記のように、立庵の残した資料は百数十篇の詩文しかないので、立庵研究の基礎作業として、詩文を読むのを元来の目的とするが、わずかに一〇首をもってこのたびは業を終えざるを得なかった。まことに前途遼遠である。注釈とは、注と釈からなるゆえにである。訳といわず、釈としたのは、研究資料という目的から、文学的に訳語を彫琢するよりも、詩意を深切に説くを欲したからである。初期としたが、詩文はかならずしも年代順に排列されておらず、内容上、あるいは標題から、年代を判定、もしくは推定できるものもあるが、まったく手がかりの無いものも少なくない。しかしいちおう詩集の詩の排列にはある程度作詩年代が反映しているものと見られ、ことに清国渡航以前の詩と渡航以後の詩とは混在していないようなので、『立庵詩鈔』『立庵遺稿』の各首巻の巻頭一〇首を最初期の詩として、まず詠むことにした。

立庵は文久元年、長門萩郊外の山田村に生まれ、明治四四年、郷里で死んだ。名は虎臣また彪、字は炳侯、通称虎之助、号は立庵の他に、深山虎太郎、晴猟雨読居士。名を彪とする資料は後記永井禾原の詩のみである。少年にして聴力を傷害したため、中学校を中退し、独学で漢学を学び、漢詩文の創作能力を身につけ、ジャーナリストとなり、はじめ山口県の地元で新聞「周南」の記者、「長州日報」主筆として県内きっての論客と称せられた。明治三一年（一八九八）、中国、当時の清国に渡航、上海の漢字紙「亞東時報」「同文滬報」に拠って健筆を揮い、文章の力で中国の与論を動かしたといわれる。一九〇〇年、義和団事件以後、北京に移り、駐屯日本軍翻訳を担当、のち袁世凱（一八五九―一九一六）の招きで保定軍官学校教習に任じられ、さらに天津駐屯日本軍の翻訳担当者となったが辛亥革命の直前に病により帰国して没する。この間「北支那毎日新聞」「順天時報」などに執筆した。墓は萩の光雲寺にあるが、荒廃して無縁状態である。酒と銃猟を好み、あばれ者といわれた。山口の新聞記者時代に、一度結婚したが失敗して以後独身を通した。完全失聴ではなく、日常会話が可能な程度の残存聴力はあったようであるが、補聴器の無かった当時、社会生活上はかなりの支障であったと思われる。詩文ともに非常な大家として、具

眼者には認められたが、日本の漢詩人、漢学者から孤立しており、死後は忘れられた。最近、明治期の漢詩、日中関係史の研究が進むに連れて、再認識され始めている。

伝記資料はきわめて乏しい。『拙存園叢稿』巻一、さらに神田喜一郎編『明治漢詩文集』（一九八一、筑摩書房、明治文学全集六二）に収める舘森袖海（一八六四－一九四二）「姑蘇記游」はその風貌を伝える。同書付記の略歴が現在知りうる伝記のすべてといってよい。永井禾原（久一郎、荷風の父、一八五二－一九一三）『来青閣集』（一九一三、私家版）に「賓綬経康、李伯元宝嘉、小田切富卿、山根立菴彪、巻放浪巻次郎と天香閣に飲む、席上戯れに伯元に贈る」一首を収める。中下正治『新聞に見る日中関係史』（一九九六、研文出版）には在中ジャーナリストとしての活動が記述され、中村義『白岩龍平日記』（一九九九、研文出版）は中国で活動した実業家、白岩龍平（一八七〇－一九四二）との交友を記述するとともに、立庵の思想にも言及する。彼が記者として執筆した山口県の新聞は現存せず、上海での新聞の存否も明かでなく、調査のすべも現在の筆者にはない。その他、明治の文献を渉猟すれば、零細な伝記資料が発見される見込みはあるが、基本的にはその残した詩文が唯一のものといえる。

詩の評価は木下彪編『明治大正名詩選後編』（一九三七、アトリエ社、一九八一、名著普及会覆刻）に詩八首が収められ、文は上記『明治漢詩文集』に「大変小変の説」一篇を収める。評論としては拙著『近代文学としての明治漢詩』（一九八九、研文出版）第四章「異邦人として」は漢詩人としての立庵を論じる、

著書は『立庵詩鈔』、『立庵存稿』『立庵遺稿』の三点がある。このうち存稿は未見、所在も不明。現存の二点はいずれも没後に知友が刊行したものである。生涯を孤独に過ごした彼に、彼を湮滅から救うために、遺作を刊行してくれる知友がいたことは幸福であった。

『立庵詩鈔』は大阪大学懐徳堂文庫所蔵、富士川英郎、松下忠、佐野正巳編『詩集日本漢詩』（一九八九、汲古書院）に影印されている。二巻。奥付は明治四五年（一九一二）一月二七日印刷、一月三一日発行、この年、七月三〇日、大正と改元される。非売品。著者山根虎之助の上に、小さく故人と標記する。前年八月一四日に没して、半年に満たない。編次兼発行者は在天津中村常三郎、中村については未詳であるが、立庵は在中の最後の時期、天津駐在日本軍の翻訳担当であったから、その時の同僚、あるいは知人で、帰国に際して、余命いくばくもないことを悟った立庵が、詩稿を託したものであろう。印刷は鉛印。印刷所は大阪市東区本町一丁目三〇番屋敷大阪国文社、印刷者は中山宗次郎である。封面に立庵詩鈔と篆字で書かれているが筆者は不明。次ページに肖像写真を掲げる。次ぎに目次、巻上は晴猟雨読園勝稿、巻下は庚子游蘇詩稿、増録諸家応酬作と題する。各巻の巻頭に長門山根虎臣炳侯甫。巻上は六三首を収め、うち三五首は渡航以前の早年の作。各詩の後に評語がある。評者の名は無いが、遺稿によって補うことができる。序を書いた周岸登のものがほとんどである。巻下は一〇丁。庚子すなわち明治三三年、四二歳の時に蘇州に遊んだときの詩。

この時は上海にいた。立庵の詩一五首、中国人の次韻作三首。計一八首、五丁をもって巻下は終わっているが、増録諸家応酬作、周序も丁数は続いていて、一〇丁は全体の丁数。中国人の贈答唱和の作一〇首。巻末に西川周岸登の序、光緒乙巳（一九〇五、明治三八）の撰。

遺稿は詩鈔と同じく大阪大学懐徳堂文庫所蔵、ほかに兵庫県の洲本市立図書館にも所蔵がある。全六巻、うち詩四巻が上冊、文二巻が下冊。奥付は大正六年四月一二日印刷。四月一五日発行、非売品。著者の名はなく、編纂者白岩龍平。白岩の事跡は上記中村の書に詳しい。発行兼印刷者、発行所はいずれも東京市芝区桜川町二〇番地東亜実進社。電話芝三七二三、振替東京一六一五一。代表者は同番地角谷八平次。印刷所は東京市麹町区紀尾井町三元真社。各巻の表紙に立庵遺稿の題箋。上冊封面に篆書で立庵遺稿、丙辰二月清道人。丙辰は一九一六（大正五）。次ぎに丁祖蔭、周岸登の序四丁。丁序は民国元年（一九一二、大正元）撰。周序は詩鈔と同じ。上冊四巻の丁数は通し番号。巻一は二二丁まで。詩鈔の巻上と全く同じで、評者の名を明記しているのと、応酬作中の一首が本巻に収められるのとの相違である。巻二は二七丁まで、虞山倡酬集と題し、戊戌、すなわち明治三一年、四〇歳の時に、虞山（常孰）に遊んだ時の詩四首と日本人、中国人の唱和の作一五首、聯句五首。第三巻は三二丁まで、詩鈔巻下と同じ。応酬作は第四巻巻末に移されている。巻四は五四丁まで、詩七一首。早年、渡航以前から晩年、萩に帰るまでの詩が含まれている。他に唱和の作一首。巻末に詩鈔の諸家応酬作を贈言として収める。うち一首は上にいうように巻一に移されている。下冊は二巻、第五巻で改丁して第六巻末まで通し番号。巻五は四四丁まで、文一三篇、みな時事を論ずる。巻六は六六丁まで。文九篇。人のために作った文を収めるほかに、白岩の跋を附する。

底本は遺稿により、詩鈔を参照した。テキストにはわずかに異同があり、おおむね遺稿の方がすぐれる。いずれも阪大懐徳堂文庫本の複写である。詩鈔巻上、遺稿巻一の巻頭の詩一〇首を録する。

晴猟雨読園賸稿

阿弥陀寺観源平戦図　阿弥陀寺に源平の戦図を観る

羊車半夜出深宮　羊車　半夜　深宮を出で
天陰雨黒鬼行空　天陰り雨黒く鬼空を行く
一片禁臠小臣飽　一片の禁臠　小臣飽き
帰来妖夢入羆熊　帰来　妖夢　羆熊に入る
何物兇禿眼如電　何物の兇禿か　眼は電の如く
高屐闊歩上朝殿　高屐　闊歩　朝殿に上る
太阿倒柄有誰救　太阿　倒柄　誰有りてか救わん
可憐一門萃冠冕　憐むべし　一門　冠冕萃まる
卅年栄華春夢痕　卅年の栄華　春夢の痕

火牛赴谷鵞起沢　火牛　谷に赴きて鵞は沢に起こり
殺気軍声満乾坤　殺気　軍声　乾坤に満つ
西風一夜海水沸　西風　一夜　海水沸き
波間江豚吹腥血　波間の江豚　腥血を吹く
繡劉画雉海底沈　繡龍　画雉　海底に沈み
千年帝魄泣鮫室　千年　帝魄　鮫室に泣く
地老天荒一浮屠　地老い天荒びて一浮屠
古壁徒留興亡図　古壁　徒に留む　興亡の図
弔古不識過客意　弔古　識らず　過客の意
丹青空供児女娯　丹青　空しく供す　児女の娯

【注】

○阿弥陀寺　下関市にあった寺。文治元年（一一八五）、壇の浦で源平両氏の決戦が行われ、平家軍は壊滅、その擁立していた八歳の幼帝、安徳天皇（在位一一八〇―一一八五）は水死した。遺体は海岸に漂着、阿弥陀寺の境内に葬られた。以後、天皇の菩提寺となり、壁に源平合戦図が描かれて、寺僧が絵解きをしていた。明治八年（一八七五）に寺を廃して赤間神宮とし、現在に至っている。従って詩題を文字通りに解すれば、明治八年以前の作となるが、その年には立庵は数え年の一五歳で、まだ少年である。神宮になっても、かなり後まで寺の建物が残っていて、絵解きも行われていたのではないかと思われる。しかし、山口で新聞記者をしていた青年時代の作には違いない。　○羊車　首四句は『平家物語』巻六に見える、平清盛（一一一八―一一八一）出生伝説によって、平家の栄華の始まりを歌う。清盛の父、忠盛（一〇九六―一一五三）は武勇にすぐれ思慮深い武士で、白河法皇（一〇五三―一一二九）に目を掛けられ、法皇が愛人祇園女御のもとへ通うときのお供をしていた。五月雨の夜通われて、祇園の社のあたりにさしかかったところ、頭は銀の針を植えたようで、片手に槌、片手に光物を持った妖しい物が現れた。法皇はてっきり鬼だと思われ、忠盛に「射殺せ」と命じた。忠盛は殺すほどのものではあるまいと生け捕りにした。正体は老僧が灯明をとぼすために蓑を着て油と手燭を持って通行していたのであった。法皇は忠盛の振る舞いに感じ入って、祇園女御を与えた。彼女はまもなく妊娠した。忠盛がこのことを報告すると、法皇は「子供が女児なら私の子にしよう。男児ならお前が育てよ」といった。やがて生まれたのが清盛で、世間ではその父は法皇だと噂した。羊車は天子が後宮の女性に通うときの車。白河法皇が祇園女御のもとに通うときのお召し車。『晋書』后妃伝に西晋の武帝（在位二六六―二九〇）は寵愛の女性が多く、毎夜どこへ行ってよいか分からないので、羊に車を引かせ、羊の止まった女性の部屋に入った。女性たちは部屋の前に塩をまぶした竹を立て、羊の脚を留めようとしたとある。○天陰雨黒　どんよりした雲におおわれ、黒々した雨の降る陰鬱な天気。亡霊や怪物の出没する状況。忠盛が老僧を捕らえた夜。杜甫（七一二―七七〇）「兵車行」に「新鬼煩冤して旧鬼は哭し、天陰り雨湿おいて声は啾啾たり。」白居易（七七二―八四六）「客の春に嶺南に遊ぶ

を送る二十韻」（白氏文集巻一七）の詩に「天黄にして颶母を生じ、雨黒くして楓人を長ず。」その自注に「楓人は夜に雷雨に因りて闇に長ずること数丈。」　○鬼行空　忠盛が捕らえた老僧。実際に空中を飛んでいたのではないが、清盛の出生の秘密によりおどろおどろしさを加えるために、空中を飛ぶ鬼としたのであろう。　○一片句　忠盛が法皇寵愛の女御を下賜されたことをいう。禁臠は天子の召し上がりものの肉。女御にたとえる。小臣は忠盛。平家はがんらいさほどの家柄でなく、忠盛の武勇と才覚で、白河法皇の寵愛を受け、立身が始まった。『晋書』謝混伝に、東晋の元帝（在位三一七―三二二）が南京の地に王朝を再建したときに、用度が不足し、子豚の肉が手に入ると、君臣が分け合って食べた。頭のてっぺんのもっとも美味な部分は元帝のために取っておかれ、これを禁臠といった。東晋の孝武帝が皇女を謝混と婚約させようとして、実現しないままに没した。袁崧という人が、謝混を婿に取ろうとしたが、友人が「禁臠に近づいてはならない」と忠告して沙汰やみになり、けっきょく謝混はその皇女と結婚した。　○帰来句　忠盛が平家の将来を予言する夢を見たという説話があったのかと思われるが未詳。阿弥陀寺でそういう話をしていたのかも知れない。あるいは『平家物語』巻五に見える、平家の滅亡を予言する清盛の悪夢かもしれないが、前三句、清盛の出生にまつわる法皇と忠盛についての句なので、続き具合が不自然である。羆熊は武勇すぐれた武士、忠盛を指す。本来は熊羆であるが、脚韻を合わせるために顛倒した。　○何物句　以下六句、平家の栄華と、全国の恨みが集中したことをいう。○兜禿、禿は剃髪した僧侶をののしる言葉。清盛が晩年出家して浄海と称し、入道相国と呼ばれたからいう。　○眼如電　眼が稲妻のように光り輝く。勢いのすさまじいさま。蘇軾（一〇三六―一一〇一）「起伏龍行」に「眼光電を作し金蛇を走らす」　○高屐　屐は履き物。木製のサンダル、下駄の類。高屐、高下駄をはいて人前に出るのは傍若無人な振る舞い。『世説新語』簡傲篇に、当時の名士、郗超の父親の前で、王献之兄弟はいつもかしこまっていたが、超が死ぬと、態度が大きくなり、高屐をはいて現れたので、父親は「せがれが死んで、子供にバカにされる。」と嘆いたとある。『平家物語』巻二に清盛が若いころ高平太と呼ばれたことが見え、それは平家の長男で好んで高足駄をはいていたからだという。　○上朝殿　内裏の清涼殿に参入を許されること。清涼殿は天皇の住居で、政務を執る場所でもあり、上殿は五位以上の高級官僚の特権。平家はもともと上殿の資格がなかったが、忠盛に至り、功績によって上殿を許され、清盛に至って位人臣を極めた。　○太阿倒柄　太阿は古代の名剣。それを逆さまにして他人に与えるのは危険な行為のたとえ。ことに臣下に権力を与えて、君主の地位が脅かされること。平家が権力を握り、後白河法皇（一一二七―一一九二）を幽閉するなど、天皇の地位をないがしろにする行動をしたことをいう。　○可憐　驚くべし。物事に深く感動した場合に用い、感動の内容はかならずしも問わない。白居易「長恨歌」の「憐むべし光彩門戸に生ず」と同じ用法。　○萃　集める。集まる。　○冠冕　冕は帝王や貴族のかぶり物。前後に糸でつづった珠玉を垂

らす。冠冕は貴族、高級官僚の象徴。『平家物語』巻一に「（平家）一門の公卿十六人、殿上人三十余人、諸国の受領、衛府、諸司六十余人なり」と繁栄の様相を伝える。　○卅年　平治元年（一一五九）の平治の乱で源氏の勢力を一掃、清盛が権力を握ってから、寿永二年（一一八三）、京都を捨てて西国に下るまで、平家の全盛の期間は二四年、三十年は概数。　○春夢　栄華のはかないことにたとえる。『平家物語』巻一に「驕れるもの久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。」とある。　○痕　痕跡。わずかな名残。平家のの栄華を今に伝えるのは『平家物語』の他に、厳島に残る平家納経ぐらいで、ほとんど跡を残さずに消滅している。　○普天　空いっぱい。　○火牛句　全国に反平家軍が蜂起し、平家が敗北を重ねたことをいう。火牛は木曽義仲（一一五四－一一八四）が越中の倶利伽羅峠の合戦で、角にたいまつをつけたウシを放って平家の大軍を総崩れにさせた奇策。この説話は『史記』田単伝に、燕軍が斉を侵略、大半を占領したときに、僅かに残る即墨城を守る田単が、角に刀剣をつけ、尾にたいまつを結びつけたウシを放って燕軍を破り、囲みを解いた故事に基づく。鵞起沢は『平家物語』巻五、富士川合戦のくだり、源頼朝（一一四七－一一九九）軍と対陣した平家軍が、水鳥の飛び立つ音を敵襲と錯覚して総崩れになったことをいう。鵞、ガチョウで水鳥を代表させた。　○沢　広い湿地。山のサワではない。　○殺気　軍隊などの発散する破壊的なエネルギー。岑参（七一五－七七〇）「九月使君の席に衛中丞の長水に赴くに奉餞す」の詩に「台上の霜威草木を凌ぎ、軍中の殺気旌旗に傍う。」　○乾坤　天地。また全世界。乾も坤もいずれも易の卦の名。乾はすべての卦が陽から成り、天を象徴し、坤はすべての卦が陰から成り、地を象徴する。詩語としては天地はより具象的であり、乾坤はより抽象的である。　○西風　がんらいは秋風とされる。壇の浦の合戦は元暦二年三月二四日（一一八五年四月二五日）であるから、時候違いであり、かつ合戦に際して強い風があったという記述はない。作者の念頭には杜牧（八〇三－八五二）の「赤壁」の詩の「東風周郎がために便せずんば、銅雀春深く二喬を鎖さん。」という句と、その詩の背後の、赤壁の戦いの時に、烈しい東南の風を利用して呉の将軍周瑜（一七五－二一〇）が火攻めを行い、曹操（一五五－二二〇）の船隊を焼き払って大勝した故事があったのであろう。周郎は周瑜、銅雀は曹操が築いた台。二喬は孫策（一七五－二二〇）と周瑜の妻である、喬家の姉妹、当時、美女として有名。東風を西風に変えたのは、瀬戸内地方で冬の季節風として吹きすさぶ強い西風を思い浮かべたのか。あるいは西方は五行説で、衰落の季節である秋の方角とされるため、滅亡を促進する風としたのか。　○江豚　イルカ。ふつうに海棲動物とされているが、長江に棲んでいるので、こう呼ばれる。晩唐の許渾（七九一－八五四？）の「金陵懐古」の詩に「江豚浪を吹いて夜還た風あり」。『平家物語』巻一一に、イルカの大群が壇の浦の平家の船隊に向かって押し寄せたので、主将の宗盛（一一四七－一一八五）が陰陽博士に占わせたところ、「イルカが引き返せば平家の勝ち、このまま向かってくれば源氏の勝ち」と判じた。言葉の終わらぬ内に、イルカの群は平家の軍船の底

をくぐって通り過ぎたので、平家の運命は尽きたと悟った。○腥血　身体から流出したばかりのなまぐさい血。合戦で流された血潮。　○繡龍　天子の衣服、龍の刺繍があった。ここは安徳天皇をさす。清盛の妻の二位の尼に抱かれて海に沈んだ。　○画雉　皇后の衣服、雉、キジの画が描いてあった。清盛の娘で高倉天皇中宮、安徳天皇の母の建礼門院徳子（一一五五－一二一三）は入水したが源氏側に救出され、京都に帰り、尼となって大原に隠棲した。『平家物語』本文は、ただ一人平家の血統を伝えていた六代御前が斬られて、平家が絶滅したことで終わるが、その後に「灌頂の巻」があり、京都に帰ってからの彼女の消息を記する。　○千年　平家の滅亡からこの詩の製作まで、おおよそ七百年、おおざっぱに千年といってもよい。　○帝魄　天子のみたま。安徳天皇のみたま。霊魂には魂と魄の二種があり、魂は軽くて天に昇り、魄は重くて地に沈む。　○鮫室泣　鮫室は鮫人の住まい。鮫人は人魚。南海の水中に棲んで機を織っており、その織物は水中で濡れず、泣くと真珠の涙を流すという。天皇の入水の時に、二位の尼は浪の底にも都があると慰めた。その都には鮫人が棲んでいるものと想像したのである。八歳の幼帝であるから、泣の字は痛切である。　○地老天荒　大地が老衰し、天が荒廃する。世界が破滅するほどの大事件。平家の滅亡は古代貴族政治体制に終止符を打った大事件であった。　○浮屠　仏、仏陀と同じ語、ここは寺院の意。　○弔古　史跡を訪れ、感慨を催し、歴史の教訓を求める。　○過客　旅人。興亡の跡に感慨し、歴史の教訓を求める、心ある人。次の児女に対する。○丹青　赤や青の絵の具で彩られた画。　○児女　男の子と女の子。みいちゃんはあちゃんといった安っぽい若者たち。源平興亡の絵解きを娯楽としか受け止めない心ない人々。　○　本篇と頼山陽（一七八〇－一八三二）の名作「壇浦行」とは同じ題材を扱うが、模倣の跡は見られない。構成の妙と文辞の華麗とは山陽がまさるが、情感の沈痛悲壮、幻想の陰暗怪奇は立庵独自の世界を開く。

【釈】

羊に牽かせた車にお召しになって、白河法皇様はま夜中に女性の元に通われるとて、奥深い宮殿から出られたところ、空は曇り、雨は黒く、怪物が空中を飛ぶように見えたが、平忠盛の武勇と沈着とで事なきを得た。天子のお召し物の肉、すなわち法皇ご寵愛の美女をちょうだいして、いやしい家来たる忠盛はすっかり満足し、あやしい夢が熊ともヒグマともいうべき勇士の眠りの中に入った。

あの稲妻のような鋭い眼をした凶暴な坊主は何やつじゃ。高下駄をはいて威勢よく天子が政務を執られる清涼殿へ入って行きよった。帝手ずから太阿の名剣の柄の方から差し出して相手に渡すように、政権をこのような者にお渡しになったのでは、誰に救いようがあろうか。あきれたものだ。一門の内に公卿を集めて全盛を誇ったとは。

三十年の栄華も春の夢と消え去って、わずかな痕跡を残すばかり。全国の人々の恨みと憤りとは天に立ちのぼって、日月も黒々となる。武士たちはいっせいに蜂起して、たいまつをつけたウシは倶利伽羅谷

の谷底へ突っ込み、ガチョウは富士川の水面から群をなして飛び立ち、動物まで平家の没落に手を貸して、殺伐の気、いくさの響きは天地に満ちあふれた。不吉な西風が一夜吹きすさんで海水が沸騰する壇の浦、平家の滅亡を予言する波間のイルカどもは海面に浮かぶなまぐさい血潮を吹く。龍を刺繍した御衣の安徳天皇も、キジの画の衣裳の建礼門院も海底に沈まれ、千歳の後の今でも帝のみたまは人魚の住まいで泣いておられる。

その時の天地の荒廃する大動乱のかたみとして、ここに一座の仏寺ががあり、古びた壁に源平の興亡を描いた図をいたずらに留めている。寺の僧侶たちはいにしえを振り返る旅人の思いを理解せず、彩色された興亡の図を若者たちの慰みに提供しているばかりだ。

【評】

周岸登曰。天陰雨黒、殺気軍声、鮫泣龍沈、描摹尽態、令後人憑弔興亡、不尽蒼涼之感。

周岸登曰く。天陰雨黒、殺気軍声、鮫泣龍沈、描摹態を尽くし、後人をして興亡を憑弔せしむ。尽きざるの蒼涼の感あり。

○周岸登　序の署名に西川周岸登とあるので、四川の変法論者で親交のあった、周善培の別名かと思われる。善培は兄弟の嗣培とともに、辛亥革命以後は当時、日本租借地であった大連に住み、清朝の遺臣として過ごした。　○天陰…龍沈　詩中の主要な字句の摘録。　○描摹描写。　○憑弔　旧蹟で風景によって過去を追想する。憑は手がかりにしての意。　○蒼涼　薄暗く寒々しい。またそういいう状態の呼び起こす感覚。

周岸登がいう。天陰雨黒、殺気軍声、鮫泣龍沈などの字句は、ことがらを描写しおおせて、後人に遺跡によって興亡を懐古させるようにした。無限の蒼涼たる感覚を呼び覚ます詩である。

題清狂道人剣舞図

清狂道人の剣舞の図に題す

素虬三尺匣裏蔵　　素虬　三尺　匣裏に蔵し
風塵漠漠長韜光　　風塵　漠漠　長えに光を韜む
千金一擲不復惜　　千金を一擲して復た惜しまず
払鞘凛然寒冰霜　　鞘を払えば凛然として冰霜より寒し
横海斬鯨志未報　　横海　斬鯨　志　未だ報ぜず
中夜聴鶏徒激昂　　中夜に鶏を聴きて徒に激昂す
酒酣起舞灯火落　　酒酣にして起ちて舞えば灯火落ち
月暈惨淡雲蒼蒼　　月暈　惨淡　雲蒼蒼
斯図不知誰所画　　斯の図　知らず　誰の画く所ぞ
心胸面目憶清狂　　心胸　面目　清狂を憶う
道人一去遂不返　　道人　一たび去りて遂に返らず

明目誰復説国防　明目　誰か復かまた国防を説かん
今看辺海風浪警　今看る　辺海　風浪を警む
安得此図上廟堂　安くにか此の図を得て廟堂に上つらん

○題清狂道人剣舞図　題は書き付ける。題画詩の場合は画の余白に書き付けることであるが、この詩は実際に書き付けたのではなく、そのつもりで作ったもの。清狂は幕末期の僧、月性（一八一七―一八五八）の号、周防遠崎村、現在の山口県大畠町の妙円寺住職、豊後日田の広瀬淡窓（一九八二―一八五六）に学び、諸国を遍歴して詩人・儒者と交わり、ことに吉田松陰（一八三〇―一八五九）、頼三樹三郎（一八二五―一八五九）、梅田雲浜（一八一五―一八五九）梁川星巌（一七八九―一八六八）などの志士と親しかった。尊王攘夷、仏教護国論にもとづく海防策を唱えて勤皇派の志士に大きな影響を与え、海防僧と呼ばれた。二七歳東遊の時に詠んだ詩「埋骨何ぞ期せん墳墓の地、人生到る処青山有り。」はよく知られている。『国史大辞典』巻五（一九九四、吉川弘文館）に掲げられている画像は、髪をやや長く延ばし、口の上下に無精ひげのある黒衣の僧が切っ先をまっすぐ上に向けた白刃を手に舞っている姿で、この詩に歌われたものと同一と思われる。

○素虬　白龍。『文選』巻七の漢の揚雄（B.C五三―A.D一八）の「甘泉の賦」に「蒼螭を駟とし素虬を六とす」とある。揚雄は龍のような名馬の意に用いるが、立庵は原義のまま白龍とする。抜き身の剣の白く光るさまをたとえる。　○三尺　剣の長さ。剣の別名とする。『史記』高祖本紀に「我れ布衣を以て三尺の剣を持し天下を取る。此れ天命に非ずや。」　○匣裏蔵　幕藩時代の「太平」で剣は使用される機会がなく、箱の中にしまい込まれている。下句の韜光も同意。○風塵漠漠　風と塵は世の中の騒がしいことの表象。漠漠は風塵がいっぱいで視野が薄暗いさま。幕藩時代を正当な政権たる天皇の朝廷が抑圧され、封建的圧政に人民が苦しんでいた暗黒時代とする、明治人としての認識を示すものであろう。　○千金一擲　大金を惜しまずに投げ出す。ここは剣を買うのに金銭を惜しまぬこと。李白（七〇一―七六二）の「漢陽より酒を病みて帰り王明府に寄す」の詩に「惜しむ莫かれ船を連ねて美酒を沽うを。千金を一擲して春芳を買わん。」　○横海斬鯨　横海は海上を横行する。漢の武帝が横海将軍を置いて、韓説を任命した。『史記』衛青列伝に付属する韓説伝に見える。海上を横行して鯨を斬るとは、男らしい大仕事をやってのけること。　○志未報　月性は海防の世論を喚起し、国家の安全を守りたいという志を遂げない以前に死んだ。未というのは画像に描かれた月性の胸中を推察しての言葉。　○中夜聴鶏　興奮して感情を行動に発散させること。『晋書』祖逖伝に、劉琨と祖逖は若いころに仲がよく、いつも同室で寝ていた。ある夜、真夜中に時はずれのニワトリが鳴いた。祖逖が劉琨を蹴り起こすと、劉琨は「こいつは悪い声じゃないぜ。」といい、起きあがって、ひとさし舞った。祖逖、劉琨は、北方遊牧民族の侵入で西晋王朝が滅亡したときに、西晋のために最後まで奮闘した英雄。○酒酣起舞　周岸登の評に引く杜甫「王郎酒酣にして剣を抜き地を斫り莫哀を歌う」

（「短歌行王郎司直に贈る」）の句を踏まえる。この詩は『唐詩選』に収める。○道人句　戦国燕の刺客荊軻が、秦の始皇帝の暗殺を志して出国するとき、易水のほとりで催された送別の宴で舞い「風蕭々として易水寒く、壮士一たび去りて復た還らず」と歌った（『史記』刺客列伝）のを踏まえる。　○辺海風浪警　国境の海では強風波浪の警報が出ている。海上の情勢が不穏なこと。具体的な事実は知りがたいが、明治前期の日本国民は、先進国の海外からの侵略におびえていた。　○廟堂　国政の場。廟は宗廟、堂は明堂。古代には君主が政策を決定するときは、まず宗廟で祖先の霊に報告した上で、明堂において群臣と討議した。

【釈】

白龍のごとき名剣は箱の中にしまい込まれ、風の巻き起こす塵ほこりがもうもうと薄暗いように、うすぐらい穏やかならぬ世相のもと、長い間、白刃の放つ光を隠していた。清狂道人こと月性師は千両もの大金を惜しげもなくはたいて、この名剣を買い求められ、鞘から抜き放てば、刃の光は氷や霜よりも冷たい。この剣をひっさげて海上を横行し、鯨をぶったぎるほどのことをしでかしたいという道人の志はまだに遂げられていないのに、真夜中にニワトリの鳴き声を聞いて、いたずらに激昂するばかりであった。酔いの回ったところで立ち上がって舞えば、その勢いで灯火が落ち、月の周りの笠はあわあわしく、雲はあおぐろい。この画はいったい誰が描いたのだろうか。魂の奥底も風貌も清狂道人を思い起こさせる。道人がこの世をひとたび立ち去ってもはや帰ってこない。はっきりした眼で未来を見通して国防を説く人として誰が今の世にいるだろう。つらつら眺めると、国境の海岸には風浪が激しいと警報が出されている。そのように海外からの侵略が懸念されるのだ。どこかでこの画を手に入れて、政府に献上したいものだ。

【評】

周岸登曰。英姿壮彩、咄咄逼人。「王郎酒酣抜剣斫地歌莫哀」、意態無以過此。

周岸登曰く。英姿壮彩、咄咄人に逼る。「王郎酒酣にして剣を抜き地を斫り莫哀を歌う」の意態も以て此に過ぐる無し。　○咄咄逼人、咄咄は驚いて思わず発する感嘆詞。なんとまあ人に迫ってくることよ。芸術作品などに圧倒的な迫力を感じたときに用いる。がんらいは殷仲堪が自分の片目を部下から気の利いた言葉で当てこすられたときの語。『世説新語』排調篇に見える。

周岸登がいう。清狂道人のさっそうたる英雄的な姿、それを表現した力のこもった画筆、杜甫の「王郎酒酣にして剣を抜き地を斫り莫哀を歌う」の詩句の構想描写もこれに及ぶことはない。そのすばらしさは読者にぐいぐい迫る力がある。

鮫洲酒楼与同人飲

鮫洲の酒楼に同人とともに飲む

危楼百尺圧滄溟　危楼　百尺　滄溟を圧し
無数帆檣隠杳冥　無数の帆檣　杳冥に隠る
忽見海雲大于繖　忽ち見る　海雲　繖よりも大に
横風吹雨入窓櫺　横風　雨を吹きて窓櫺に入る
雷車隠隠電母哭　雷車　隠隠として電母哭し
魚龍出没海気腥　魚龍　出没して海気腥し
須臾雨歇天如拭　須臾にして雨歇み天は拭うが如く
浮水山連一髪青　水に浮かぶ山は連りて一髪青し
浴後欄角方呼酒　浴後　欄角　方に酒を呼べば
晩風吹衣鳴檐鈴　晩風　衣を吹きて檐鈴を鳴らす
一痕新月小如玦　一痕の新月　小なること玦の如く
楼楼灯火多于星　楼楼の灯火　星よりも多し

【注】

○鮫洲　東京品川近辺の海岸、『江戸名所図会』巻二に鮫頭明神があり、その説明に「砂水の海浜にあり、ある人の曰く、砂水、昔は鮫洲に作りけると」今、京浜電鉄に鮫洲駅がある。立庵は三〇歳前後に一時、上京していた。東京で何をしていたかは明かでない。前後の状況からして、やはりジャーナリズムの世界にいたであろうと推測される。

○同人　どのような仲間なのか明かでないが、おそらくジャーナリスト仲間。　○危楼　高楼。危にはアブナイとタカイの二つの意味がある。　○百尺　一尺は三〇センチメートル強。百尺は高楼の高さ。たとえば『唐詩選』所に収める王昌齢（六九八―七五五）「従軍行」に「烽火城西百尺の楼」　○滄溟　海原、陰鬱な暗い海面というイメージがある。　○杳冥　無限のかなたの不可視の空間。　○繖　傘。初めは傘ほどの大きさだった雲が見る見る広がっていったというのか。　○窓櫺　窓のれんじ。櫺はれんじ、窓の外に縦に並べた幅に狭い板を打ち付けて、家内への他人の侵入を防いだもの。古い町並みには今でも見られる。当時は東京でも見られたであろう。　○雷車　カミナリの鳴るのを車のきしる音に見立ててこのように呼んだ。　○隠隠　車のきしる音の形容にも、雷の鳴る音の形容にも用いる。ごろごろ。西晋の傅玄（二一七―二七八）の「雑言」に「雷隠隠として妾をして感ぜしむ。」　○電母　イナヅマ。雷神を男性として雷公と称したのに対して女神と信じられた。　○魚龍　魚類と龍、水中の生物。　○山連一髪青　海の彼方に山が連なり、一筋の青い髪の毛のように見える。東京湾の対岸、房総の山々。蘇軾「澄邁駅の通潮閣」の詩に「杳杳として天低く鶻の没する処、青山一髪是れ中原。」またこれを受けた頼山陽の「天草洋に泊す」に「雲か山か呉か越か、水天髣髴青一髪。」　○檐鈴　軒につるした風鈴。　○一痕　淡い新月を天になすりつけられた絵の具などの痕に見立てた表現。　○玦　帯などにつける玉。環になっていて、切れ込みがある。楚の項羽と漢の高祖が鴻門で会見した

ときに、項羽の軍師、范増は高祖の暗殺を謀り、身に帯びた玦を挙げて項羽に決断を迫ったが、項羽は応ぜず、かくて項羽の運命は定まった。（『史記』項羽本紀）。ただし作者は実際の形を知らず、三日月型のものと想像していたのであろう。

【釈】

高楼の高さ百尺、暗い海原を押さえつけ、無数の帆柱がぼんやりと薄暗い水平線の彼方へ隠れていく。傘よりも大きい雲がたちまち現れて、横殴りの風が雨を窓の中へ吹き入れる。カミナリは車の音のようにごろごろ鳴り、イナヅマは泣き叫び、魚や龍は海面を出たり入ったりして、その臭気で海の雰囲気はなまぐさい。たまゆらに雨はやんで、天は吹き清めたように晴れ渡り、水面に浮かんだように見える、かなたに連なる山々は一筋の青い髪の毛のようだ。風呂から上がって、欄干の角、座敷の一隅から酒を持ってこいといいつけようとすると、風は着物を吹いて、軒端の風鈴を鳴らす。一刷毛天になすりつけた痕のような新月の小さいことは玦の玉のようで、見渡すかぎりの酒楼の灯火は星々よりも多いことよ。

【評】

周岸登曰。筆呵雷電、気圧蛟龍。凭眺海楼、横鋪画境。猶想見登高長嘯、臨風把酒時也。

周岸登曰く。筆は雷電を呵し、気は蛟龍を圧す。海楼に凭り眺め、画境を横ざまに鋪く。猶お高きに登りて長嘯し、風に臨みて酒を把る時を想見するの時のごとし。

○横鋪画境　横に広げる絵巻を想定して、その画のように世界を写している詩だというのである。鋪はくりひろげる。　○登高長嘯　長嘯は口をすぼめて長く息を吹き、発声すること。長く声を出すとか、口笛のことだとかいう説がある。道教の修行の一種だといわれるが、魏晋以来、教養人の風雅な行為とされる。登高は九月九日に高所に登って厄払いをする行事であるが、ここは晋の阮籍が、隠者の孫登を蘇門山に尋ね、その長嘯を聞いた故事を想起しているのであろう。『晋書』阮籍伝に見える。

周岸登が言う。この詩では立庵の筆の勢いは雷電を叱りつける意気込み、詩にみなぎる気合いは蛟龍を圧倒せんばかりだ。海岸の楼閣に登り、よりかかって展望し、絵画の世界を横にくりひろげる。高台に登って長くうそぶき、風を前にして酒杯を手に取る時を想見するようなものだ。

空斎伯相病痊入朝有此寄

空斎伯相病い痊えて入朝さる此の寄有り

主恩未許趁漁樵　　主恩　未だ許さず　漁樵を趁うを

珂馬丁当去早朝　珂馬　丁当　去りて早に朝す
上苑梅花経雨落　上苑の梅花　雨を経て落ち
御溝楊柳帯煙招　御溝の楊柳　煙を帯びて招く
当年廊廟多新進　当年の廊廟に新進多く
回首江湖少旧僚　回首すれば江湖に旧僚少し
眼断湘南煙水緑　眼は断ゆ　湘南　煙水の緑なるに
春帆無数夕陽遙　春帆　無数　夕陽遙かなり

【注】

○空斎　山田顕義、一八四四―一八九二。長州出身の軍人、政治家。吉田松陰の松下村塾に学び、蛤御門の戦いから五稜郭戦争に至る、長州藩の関係した維新変革期の一連の戦いに参加、維新後は佐賀の乱、西南戦争の鎮圧に功績があった。西南戦争後は政界に転じ、第一次伊藤内閣で初代司法大臣となって以来、司法大臣を歴任、近代的法制整備に当たった。九一年の大津事件で、来日のロシア皇太子暗殺を謀った、津田三蔵に大逆罪適用を主張したが、大審院（現在の最高裁判所）院長児島惟謙（一八三七―一九〇八）が容れなかったので、病と称して辞任した。翌年、枢密顧問官に任ぜられたが、まもなく病死。陸軍中将、伯爵。したがってこの詩は九二年、山田が枢密顧問官に就任したときの作となる。　○伯相　伯爵で大臣である人。○主恩　君主の恵み。天皇の恵み。　○漁樵　漁夫、樵夫は漢詩の世界では隠遁者の仮の姿とされる。　○珂馬　珂をつけた馬。珂は馬の腰飾りで、馬が歩むとちゃらちゃら鳴る。貴族の乗馬に用いられる。貴族的な雰囲気を出すための詩語となっている。　○丁当　珂が鳴る音の擬声語。○早朝　朝早く参内すること。日本語のソウチョウではない。中国の官吏の出勤時間は非常に早く、午前三時頃、星をいただいて参内した。明治の官僚が実際にそんなに早く出勤したわけではないが、詩的世界のできごとである。　○上苑　上林苑の略称、漢の武帝の造営した大規模な御苑。ここは宮城（現在の皇居）の御苑。○御溝　お堀。皇宮を取り巻く堀。宮城のお濠。　○廊廟句　廊廟は廟堂と同じ。政務を執る場所。要路の当局者。人がある年齢になると実感される句。○江湖　世間、浮き世。官界以外の世界を広くいう。　○眼断二句　眼断は目断と同じ。視野がなにものかによりさえぎられること。湘南は神奈川県中部の海岸地方。今は東京の衛星都市が連なっているが、当時は保養地で、大官、富豪の別荘が多かった。空斎の別荘もあったのである。春帆、下関に、のちに日清講和折衝の舞台となる著名な料亭、春帆楼がある。あるいはこれによって、山田の郷里長州を暗示しているのかもしれない。それは考えすぎにしても、作者も山田も熟知している、瀬戸内の春の海を思い浮かべているようには思われる。この時代には海に浮かぶ白帆は実景であった。二句は空斎に官途につかず、湘南の別荘での優游自適を勧める。

【釈】

天皇陛下のみ恵みは手厚くて、漁夫や樵夫のような隠遁の気楽な境

涯に入ることをなかなかお許しにならず、それで閣下は腰飾りをチャランチャランと鳴らす馬にまたがって、朝早くから参内する。今は春だから、上林苑ともいうべき宮城の御苑の梅の花は、雨にあって落ちて散り尽くし。お濠の柳はもやのかかった中から、差し招くように枝を垂らしている。現代の要路の当局者には新進気鋭の人々が多く、世間を振り返ってみれば、閣下の旧同僚は少なくなってしまっている。視野は湘南のもやと海の水によって断ち切られ、遙かに沈んでいく夕陽を浴びて、無数の春の帆掛け船が浮かんでいる。閣下があの帆掛け船で古里へ帰られ、のどかに過ごされてはいかがなものか

【評】

周岸登く。清韻琅琅、声情款款、廊廟江湖、相感於言外者矣。

周岸登曰く。清韻琅琅、声情款款、廊廟江湖、言外に相い感ずる者あり。

○清韻　韻は発音から来る響き。それがすっきりとさわやかに感じられる。　○琅琅　金属や玉がふれあって発する清らかな音の擬声語。　○声情　声は具体的な発音、発声、それがあらわす感情。　○款款　誠実さの表れているさま。

周岸登がいう。すがすがしい調べはチリンチリンと響き、発声にこもる感情は真実にあふれている。廊廟と江湖の対比の中に、言外に人に感じさせるものがある。

贈金玉均

金玉均に贈る

隻手空期廻倒瀾
壮図躑躅夢闌残
腐儒不識千秋計
俗吏徒偸一日安
故国山河余涕涙
天涯冰雪幾辛酸
病余猶有経綸在
欲把東瀛打作丸

隻手　空しく期す　倒瀾を廻らすを
壮図　躑躅　夢闌残
腐儒は識らず　千秋の計
俗吏　徒に偸む　一日の安
故国の山河　涕涙を余し
天涯の冰雪　幾ばくの辛酸ぞ
病余　猶お経綸の在り有り
東瀛を把りて打して丸と作さんと欲す

【注】

○金玉均　一八五一―一八九四。李朝朝鮮末期の政治家。日本の明治維新後の発展を見て、朝鮮の近代的改革を志し、一八八四年一二月にクーデターを起こしたが、三日で失敗。日本に亡命したが、国際的紛糾を警戒する日本政府に冷遇されて、小笠原島、北海道などを転々とさせられ、一八九〇年にようやく東京に戻る。ついに朝鮮政府の刺客に上海に誘い出されて暗殺された。前作と同じころの作であろう。　○隻手　片手。独力。金玉均が独力で国を救おうと努力したことをいう。　○廻倒蘭　崩れかかる荒波を押し返す。崩壊しようとする国家や社会を盛り返そうとするたとえ。韓愈（七六八―八二四）「進学の解」

の「狂瀾を既倒に迴らす」というのにもとづく。金玉均が衰えた朝鮮国を再建しようとしていることをさす。　○壮図句　壮図は壮大な計画。金玉均が朝鮮復興のためにクーデターを起こしたことをいう。躑躅はいったり来たり、ぐずぐずして進まないさま。計画のうまくはかどらない形容。闌残、蘭も残も消滅しようとしてまだ消滅していない状態をいう。夢がさめそうでさめない。この句、周岸登の評語を参照すると、いつまでも改革の失敗にこだわってくよくよしていていいのかという励ましのことばのようである。　○腐儒　腐れ儒者。理論にとらわれて実行のともなわない学者をののしることば。漢の高祖はこうした手合いが嫌いで、竪儒（小僧儒者）とか腐儒とかいってののしったことが、『史記』『漢書』などに見える。李朝朝鮮は朱子学を尊信し、科挙を施行して、儒教国家をめざしたが、末年になると思想としての活力を失い、反動的な保守政治の支柱となった。ゆえに千秋（永遠）の計を知らぬのである。　○俗吏　見識のないつまらぬ役人。吏は役所の書記。事務官。当時の朝鮮は封建的官僚制が行き詰まって、状況への対応能力を失っていた。そのことに対する批判。　○故国句　故国は後に残してきた祖国。祖国をしのんで泣いてばかりいるのかという励ましの句であろう。　○天涯　天涯は空の果て、金玉均にとって外国である日本を指す。　○冰雪　外国での不如意な生活、日本政府の冷遇、本国政府の迫害など、金玉均に襲いかかる苦難の象徴。○経綸　糸を整理するように、国政を整える。経も綸も糸。　○欲把句　東瀛は日本の別称。中国から日本を呼ぶことば。東は中国の東方に当たるため。瀛は瀛洲の略。蓬莱山とともに、東方海上に浮かぶと信じられた神話的な島。清末の兪越（一八二六―一九〇六）に、日本人の漢詩の選集『東瀛詩選』がある。日本と手を結んで朝鮮の改革をしようという金玉均の理想をいう。中国の視点から見たことばを自国に用いていることは注意を要する。打は何らかの動作を伴う行為をあらわす動詞。ヤル、スルに近い。ここは丸める動作をする。日本の援助によって改革を計ろうとする金玉均の方針は、無二の同志の朴泳孝（一八六一―一九三九）が日本の朝鮮併合後、協力者として侯爵を与えられたように、対日協力者に転化していく危険をはらんでいたが、当時は日本の侵略的態度はあらわでなく、援助する日本人の友人もあり、立庵の詩に見られるように愛国者として同情する雰囲気も強かったようである。

【釈】

あなたは片手でもって荒波を押し返そうとするかのように、単身で朝鮮国改革という大事業に挑戦されたが、それは失敗して空しい期待に終わり、雄大な計画はいまだに完遂できずに立ち往生の体で、改革の夢も今はあまりに見過ぎて消えてしまいそう。お国の腐れ儒者どもは永遠に国を安んずる遠大な計画は知らないし、お国の木っ端役人どもその日その日の安逸を貪るばかりで、国家がどうなろうと気にも掛けていない。このように為政者に人を得ないでみじめな状態に陥っている祖国の山河を追憶しても、あなたに残されているのは涙ばかり。

空の果てのこの国へ来られて以来、次々と襲いかかる氷か雪のような苦難はいかほどであろうか。あなたはその上、ご病気からようやく回復されたばかりだが、それでも国政改革の抱負はお持ちだ。それは東瀛、日本のの国と手を取り合い、一丸となって改革を進め、ともどもに発展することだ。

【評】

周岸登曰。朝鮮文弱、与我同病。国家大計、尽廃於腐儒俗吏之手。此詩良薬苦口、以激厲之詞、寓懇摯之意、維持東亜。洵属偉人。

周岸登曰く。朝鮮は文弱にして、我と病を同じうす。国家の大計、尽く腐儒俗吏の手に廃せり。此の詩は良薬口に苦く、激厲の詞を以て、懇摯の意を寓し、東亜を維持す。洵に偉人に属す

○文弱　中国人は伝統的に武備を軽視し、文事を尊重、朝鮮もこれに倣った。　○我　中国、当時の清国。　○良薬苦口　よい薬は飲むときは苦いけれども、病気を治せる。同様に忠告は聞いているときは不愉快だが、行動を改善できる。『孔子家語』六本篇「孔子曰く『良薬は口に苦くして病いに利あり。忠言は耳に逆らいて行いに利あり。』」

○激厲　現代語の激励とは同じでない。相手に痛いことばで、発憤させる。本篇の、ことに第二句、第五句などはそれであろう。

周岸登がいう。朝鮮は文弱の国であって、我が清国と同じ病にかかっている。すなわち国家の将来のための遠大な計画は、ことごとく腐れ儒者、木っ端役人の手でうち捨てられているのである。本篇は良薬は口に苦しというように、相手を発憤させることばの中に、ねんごろで手厚いまごころが宿されていて、東アジアの国々をつなぎ止め、その力を保存している。このような詩を作る人はまことに偉人に属する。

芳山懐古（四首）

○芳山は吉野山。吉野をまた芳野とも書き、また芳には春のかぐわしい花という意味があるので、花の名所たる吉野にふさわしい。後醍醐天皇（在位一三一八－一三三九）以下の南朝（一三三六－一三九二）の四帝が、北条氏、足利氏の勢力に対して、皇室の正統を護った、歴史の大ドラマの舞台。製作時期は不明だが、渡清以前の作。上京の往来に立ち寄ったか。四首の連作。

何同劉蹶与嬴顛　何ぞ劉蹶と嬴顛に同じからんや
剣璽遙従上古伝　剣璽は遙かに上古より伝わる
勿向春風問南北　春風に向かいて南北を問う勿かれ
天潢不改二千年　天潢の改まらざること二千年

【注】

○何同句　何同は反語、同じでない。劉蹶嬴顛の劉は漢、嬴は秦の皇

室の姓。中国の王朝を表す。顛も蹶もくつがえる、倒れる。王朝が滅亡することをいう。ここは南北朝の動乱との比較。南北朝は後醍醐天皇が鎌倉幕府を倒したのに始まって、後亀山天皇が北朝の後小松天皇と講和したのに終わる。日本に二人の天皇が並立して半世紀以上に渡り争った、史上空前絶後の動乱であり、後世、おおむね南朝が正統とされながらも、いずれが正統かの議論が絶えなかった。明治時代に入り、一九一〇年、政府が南朝を正統と決定、一九四五年の敗戦まで国の公式見解とされた。それまでも一般的には、徳川光圀（一六二八―一七〇〇）の思想で編集された『大日本史』や、国民的人気のあった頼山陽の『日本外史』の影響などで、南朝正統の感情が広まっていて、立庵もその立場で作詩している。中国では王朝が滅亡すると、皇室は断絶して次の王朝の皇室に取って代わられるのに対し、日本では天皇が並立しても、ともに一つの皇室に属し、皇統は一貫しているから同じではないのである。　○剣璽　璽は玉で作った天子の印章。皇位のしるしとする。日本では皇位のしるしである玉として、ヤサカニの勾玉のことに用いる。クサナギの剣と、ヤサカニの勾玉。皇位の象徴として、皇室に伝えられた神器。これにヤタの鏡を加えて三種の神器と称する。『古事記』にアマテラスオオミカミがニニギノミコトを地上に降臨させたときに授けたものとある。のちに鏡は伊勢神宮に、剣は尾張の熱田神宮に祭られ、宮中には模造品を置いたが、鏡は火災にあって焼失したという。剣は平家滅亡の時に壇の浦に沈み、さらに代わりの剣が作られた。けっきょく皇室に古代から伝わるのは勾玉のみとされる。南北朝の時代、剣と玉は後醍醐天皇によって持ち出され、南朝正統説の重要な論拠となった。『日本外史』では神器とともに剣璽ということばが用いられる。　○上古伝　上古ははるかな古代。神器はタカマガハラに由来する、神代から伝わる宝物とされる。　○勿向句　南北の天を問うというのは、南朝と北朝いずれが正統かを問うということ。作者には答えるまでもない自明のことである。○天潢　銀河。また皇統をいう。天子の家系を銀河の流れに比す。　○二千年　日本の歴史全体。神武天皇が大和の橿原の宮に即位してから一九四〇年まで、二六〇〇年が経過したとされる。二千年はおおざっぱに数えた数字。

【釈】

劉氏の漢がくつがえり、嬴氏の秦がぶったおれたように、中国では王朝が滅ぶと皇室は断絶してしまうが、我が国では二人の天皇がいいるという大動乱の中でも、一系の皇統は護られた。そこが中国とは違うのだ。正統のしるしとして天子の奉じたまう剣と勾玉とは遙かに遠く神代から伝わった尊いものなのだ。春風に向かって南の空、北の空どちらへ向かって吹くか、つまり南朝、北朝いずれが正統かなどと尋ねてはならぬ。スメラミコトのお血筋が、銀河が変わらぬように変わらずに二千年続いてきたのは厳然たる事実であるぞ。

説道当年駐翠華　　説道（いうなら）く当年に翠華（すいか）を駐めしと
山桜猶擁梵王家　　山桜（さんおう）　猶お擁す　梵王の家

零紅満地春狼藉　　零紅　地に満ちて春に狼藉たり
忍踏先皇遺愛花　　忍げて踏む　先皇　遺愛の花

○説道　伝聞を示すことば。という話だ。　○当年　そのかみの年。過去のある事件の起こったその年。　○翠華　翠はカワセミ。緑色の美しい羽毛を持つ。その羽根で作った旗竿の頭の装飾品。天子が行幸に際して用いた。　○山桜　吉野はサクラの名所。山上の蔵王権現の神木として寄進され、十数万本に達する。　○梵王家　梵王は梵天王。ヒンドゥー教の世界創造神ブラーマンに由来し、仏教に取りいれられて護法の神となった。ここは蔵王権現。役の行者の祈祷で、衆生を救うために示現した憤怒相の神。梵王家は金峰山寺。蔵王権現を祭る蔵王堂を本堂とする。中世、有力寺院として繁栄、京都の政界にも影響力があった。後醍醐天皇は寺内に行宮を構えて住んだ。　○零紅　紅色の小片が散りこぼれる。あかい花びらの散りこぼれる。　○狼藉　オオカミが草を敷いて寝ると、その跡は草が押しつぶされて乱れているというところから、無秩序に散らかったり、入り乱れている状態をいう。　○忍　したくないことをやむをえずする。　○先皇　すでに世を去った天子。ふつうは先代の天子をさすが、ここは後醍醐天皇。

【釈】

聞くところによると、そのむかし、後醍醐天皇は賊臣足利尊氏のために都を追われ、この吉野山に御旗をとどめてお住まいになられたとか。その天皇の苦悩のお姿を見守っていたヤマザクラは、今もなお天皇のお住まいになった、蔵王権現を祭る金峰山寺を取り巻いている。そのサクラの小さいあかい花びらが、地上を埋めて散り敷き、たけなわの春は乱れきっている。この花びらも後醍醐天皇のめでたもうたものと思えば踏みたくはないのだが、なにしろ地面いっぱいでよけることもないので、やむをえず踏んで通っていく。

宮槐零落草蕭蕭　　宮槐は零落して草は蕭蕭と
回首春風恨未消　　首を回らせば春風に恨みは未だ消えず
飛花一道冠蓋散　　飛花　一道　冠蓋に散じ
空壇合有鬼神朝　　空壇　合に有るべし　鬼神の朝するの

【注】

○宮槐　槐はエンジュ。マメ科の落葉喬木、真夏に薄い黄白色の花をつける。中国では庭木や街路樹に好まれ、詩にもよく用いられる。宮槐は宮中に植えられたエンジュ。ここは今はない吉野の行宮の庭木。王維（六九九？－七六一）が安禄山の反乱軍に捕らえられ、監禁されていたとき、安禄山の暴状を聞いて作った詩の中で、玄宗皇帝が亡命して荒廃した宮殿のさまを詠じた句に「秋槐葉は落つ空宮の裏。」なお王維の別荘、輞川荘の中に宮槐陌があり、都留春雄氏の説に「エンジュの一種、守宮か」という。中国詩人選集「王維」（一九五八、岩波書店）。

○恨　解消不可能な怨恨。後醍醐天皇の、天皇親政政治復活の戦いに

敗れ、吉野の山中に憤死した恨み。○冠蓋散　蓋は車につける傘。古代の車はオープン・カーで、蓋を取り付けて風雨や日光をさえぎった。冠蓋は貴人の調度、貴人のシンボル。後醍醐天皇を祭る祭儀に参列しようとする鬼神たちのの行列。それに散っていく花びらが散りかかる。詩鈔では散冠蓋に作るが、それでは平仄が合わない。遺稿に従った。○空壇　空は存在するべきものが欠如している。壇は後醍醐天皇の霊を祭る祭壇。祭祀者も参拝者もいないで放置されているから空なのである。もとよりまぼろしの祭壇。　○鬼神　超自然的な精霊。南朝のために戦った人々の亡霊。あるいは蔵王権現を祈りだした役の行者が、鬼神を使役して葛城山から吉野山まで石橋を掛けようとしたという伝説から、山中の鬼神をも想定しているのかも知れない。　○朝　王者のもとに臣下たちが出頭する。古代に君主が臣下たちを集めて政治問題を討議する広場を朝と呼んだところからのことば。　○この詩は白居易「長恨歌」の「春風桃李花開く日、秋風梧桐葉落つる時。西宮南内秋草多く、落葉階に満ちて紅を掃わず。」の一節を換骨奪胎したのであろう。

【釈】

宮殿のエンジュの葉は散り尽くし、草はわびしく揺れている。振り返ってみれば春風は吹いても、後醍醐天皇生前の恨みはまだ消えてはいない。一筋の散り行く花が貴人の行列に散りかかるのが私の心の眼にはありありと見える。天皇をお祭りする無人の祭壇にきっとお参りする鬼神たちがあるのに違いない。

万木蕭条摧北風　　万木　蕭条　北風に摧かるるも
猶余桜樹護行宮　　猶お桜樹を余して行宮を護る
三朝五十余年事　　三朝　五十余年の事
只在南柯一夢中　　只だ南柯の一夢の中にあり

【注】

○万木　無数の木々。韋応物の「蕭河南に贈る」の詩に「秋深くして万木疎なり」というように、詩中では秋になってすべての木々の葉が散り尽くした光景として用いられることが多い。これは常緑樹の多い日本では単なる詩的風景と受け取られやすいが、北部中国では実景である。　○蕭条　わびしい雰囲気が一面に広がっているさま。秋の雰囲気の形容に用いた例として、岑参の「大梁に至り却って匡城の主人に寄す」の詩に「仲秋蕭条の景」また「襄州の任別駕を送る」の詩に「蕭条たり楚地の秋」。　○北風　北方の京都から侵攻してくる足利氏の猛威を象徴する。南北朝といいながら、全国の大半は足利氏の支配下にあり、南朝は吉野にさえいたたまれず、天皇が大和河内の各地を転々とせねばならぬような状態であった。　○桜樹　吉野山中のサクラの木であるとともに、南朝に忠誠を守り続けた人々を象徴する。○行宮　行在ともいう。天子が都を離れた時に住まう仮の御所。○三朝五十余年　三朝は後醍醐以後の三帝を指すとも考えられるが、

南朝四帝のうち、長慶天皇（在位一三六八ー一三八四）を除いたものであろう。同天皇は南北朝動乱のさなかに在位し、史料が少ないため、在位が疑われており、明治時代には在位説が支配的ではあったが、歴代天皇には算入されていなかった。一九二六年（大正一五）に至り、大正天皇によって在位がようやく承認された。南朝は一三三六（南朝延元元、北朝建武三）に後醍醐天皇が吉野に移ってから、南北講和（一三九二、南朝元中九、北朝明徳三）により、後亀山天皇（在位一三八四ー一三九二）が京都に帰って退位するまで五六年間存続した。

○南柯夢　唐代の伝奇小説「南柯記」に、淳于芬というものが昼寝の夢に槐安国に迎えられ、王女を妻とし、南柯郡の太守となって二十年間栄華に耽ったが、妻が死に家に帰って夢がさめ、庭のエンジュの木を調べてみると、巨大なアリの巣があり、夢中にアリの世界にいっていたことが判明したというのに基づく。南朝を南柯の国にたとえた。南朝の歴史を南柯の夢にたとえる見方は、幕末以後顕著になった、勤皇思想による南朝崇拝とは異なる。

【釈】

よろずの木々が北風に攻撃されてしおれ枯れるように、北方から襲ってくる足利軍のために、国土が斬りなびけられるなか、なおサクラの木が行宮を護るがごとくに取り囲んでいるように、忠節の士は天皇を守護して変わらなかった。南朝三代五十余年の歴史は、ただ淳于芬が昼寝の夢に見た南柯の国の歴史と同様、はかない夢に過ぎなかった。

【評】

蒼度公曰。四絶直逼唐賢。立庵詩真無体不工。又曰。桜者大和文明之花也。立庵詩又大和文明之花也。

蒼度公曰く。四絶直ちに唐賢に逼る。立庵の詩真に体として工みならざる無し。又た曰く。桜は大和文明の花なり。立庵の詩も又た大和文明の花なり。

○蒼度公　未詳。日本人かもしれない。　○唐賢　唐代のすぐれた詩人。唐代が中国古典詩の絶頂であるのは文学史における共通認識。唐代の詩人を唐賢と呼ぶものに、清の王士禎（漁洋）編集のアンソロジー『唐賢三昧集』がある。　○無体不工　あらゆる詩体のどれもみな上手である。　○又曰　詩鈔にはない。

蒼度公がいう。芳山絶句四首は唐代の大詩人の域にまっすぐに接近していて、まさるとも劣らない。立庵の詩はまことにあらゆる詩体のどれもみな上手である。また同人がいう。サクラは日本文明の花である。立庵の詩もまた日本文明の花ともいうべきすばらしいものである。

辛卯除夜

辛卯の除夜

臘鼓声微夜色凝　臘鼓　声微にして夜色凝り
陰風老屋冷于冰　陰風　老屋　冰より冷なり

十年破壁塵生剣　十年　破壁　塵剣に生じ
五夜茅檐雪撲灯　五夜　茅檐　雪灯を撲つ
光景眼前駒隙過　光景　眼前　駒隙を過ぎ
窮愁客裡馬齢増　窮愁　客裡　馬齢増す
文章偏覚鬼書巧　文章　偏えに覚ゆ　鬼書の巧なるを
欲写手亀呵気蒸　写さんと欲すれば手亀し気を呵して蒸す

○辛卯　明治二四年（一八九一）、三〇歳。この詩は旅先の宿屋で年を越しての作のようである。　○臘鼓　大晦日に年を送る鼓。除夜の鐘を意味する。がんらいは陰暦一二月八日の臘の祭りに鳴らされた鼓。六朝ごろの湖北省地方の民俗を記録した『荊楚歳時記』に、臘日には村の人々が腰のくびれた鼓を打ち、外国人の面をかぶり、さらに金剛力士に仮装して疫病を追い払ったという。　○声微　耳の不自由な作者が、除夜の鐘のかすかな音を聞き取ろうと、必死に耳を澄ませている思いが読みとれる。○夜色　夜の気配。夜の空間に広がる暗い色。○陰風　冬の風、北風。　○老屋　古くなって荒廃した建物。作者は木賃宿のような古ぼけた安宿に泊まっていたのであろう。　○塵生剣　長い間使わなかったので、剣に塵が積もっているのである。現実の状態ではなく、作者の自負に相応する活動ができないことに対する悲しみの象徴。　○五夜　一晩中。漢代、宮中では一夜を甲乙丙丁戊の五つつに区画していた。　○茅檐　茅葺き屋根の軒端。そまつな家。現代ではまれになっているが、実景かどうかはともかく、当時はまだ珍しくなかった。　○光景　光線。光はヒカリ。景は光線。ここは瞬間的に通り過ぎるものとしての光線。○駒隙過　時間の経過の早いこと。また人生のはかないこと。『荘子』知北遊篇に「人の天地の間に生まるるは、白駒の隙を過ぐるがごとし」とある。白駒は駿馬、隙は孔や隙間。このことばの意味は、隙間から見ていると駿馬が走り抜けるのが見えるほどの短時間ということ。　○客裏　旅の中、客は旅人、裏は中、内側。　○馬齢　自分の年齢の謙称。馬の年齢は歯によって知ることができるところから出たことば。　○鬼書　鬼は鬼神。鬼神から授けられた尊い書物。たとえば、穀城山麓の黄石が老人となって漢の張良に授け、高祖の秦末の動乱に平和をもたらしたという『太公兵書』（現存の『三略』がそれという）のような書物。作者が学ぼうとする貴重な書物。何を指していうのか、現在は知りがたい。　○手亀　亀は手にアカギレができること。手足の皮膚が寒気によって裂けるもので、筆者が子どものころは珍しくなく、かなり痛いものであった。○偏覚　偏は偏りすぎていると思われるまでに熱中している状態、覚は自覚する、そういう感じがする。　○欲写　江戸時代には書物は貴重品だったので、学習のために筆写することが行われた。明治も早いころにはまだその習慣が残っていたのである。　○呵気　息を吹きかけて手を暖めること。昔は防寒具が不完全だったので。冬になるとよくやっていた。

【釈】

除夜の鐘のかすかな音に耳を澄ませていると、夜の暗い気配が身の回りに凝結するのが感じ取られ、北風が吹きつけて、古ぼけた安宿は火の気もなく、氷よりも冷たい。十年間持ち回った剣はついに使う機会もなく、破れ壁に立てかけておくと、私がこれといった働きをすることもなかったことを実証するかのように塵が積もっており、一晩中、茅葺きの軒から降り込む雪が灯火をたたくように、室内を舞っている。駿馬が駆けすぎるのをものの隙間から見ているように、目の前を光線が過ぎ去って時間が容赦なくたっていき、追いつめられた悲哀を抱き、旅人の境涯の中でいたずらに年齢だけを食っていく。この書物の文章は鬼神が授けたかと思われるほどのすばらしさだと痛感し、書き写そうとしてあかぎれのできた手を暖めるために息を吹きかける。

【評】

周岸登曰。旧作除夕詩有「竈祀黄羊計帰日、文章招信不論銭。」之句。与先生同一感情。至如匣剣生塵、寒燈撲雪、客子光陰、英雄短気、近数年又同一写照也。噫。

周岸登曰く。旧作の除夕の詩有「竈に黄羊を祀りて帰日を計り、文章信を招きて銭を論ぜず。」之句。先生と同一の感情なり。匣剣生塵、寒燈撲雪、客子光陰、英雄短気の如きに至りては、近数年又た同一の写照なり。噫あ。

○竈祀黄羊　黄羊は黄色のヒツジであるが、アカイヌを黄犬、アカウシを黄牛というから、同様な毛色の羊であろう。漢の宣帝の時に、陰子方というもの家で臘日の朝に炊事をしていると。竈の神が示現した。子方はうやうやしく礼をし、家にあった黄羊を供えて祭った。のちに家は急速に豊かになり、一族は繁昌して、後漢初代の光武帝の陰皇后を出した。これより臘日に黄羊を供えて竈を祭る習わしとなった。『後漢書』陰識伝に見える。陰識は皇后の兄。ちなみに竈を神聖な場所としてその神を祭る習俗は、中国にも日本にも広く見られた。　○英雄短気　英雄の心をそぎ落とす。北宋の蘇丕という人が科挙を受けて失敗したので、「此の中は最も英雄の気を短ならしむ」と捨てぜりふを残して帰郷、隠棲して五十余年、家から出なかった。蘇丕のエピソードを離れて一人歩きしていることばのようである。前の三句が詩中の句の中から摘録されており、これも詩中の句に基づくと思われるが、該当する語が見いだされない。あるいは未定稿にあって削除されたものか。下に続く周岸登自身の感慨かもしれない。　○写照　写真。現代中国語では写真を撮ることを照といい、写真を照片という。

周岸登がいう。私の旧作の除夜の詩に「赤毛のヒツジを竈の神に供えて家に帰る日を数え、文章は信頼を呼び寄せるために、お金を惜しまずに買い求める」という句があった。まさに先生と同一の感情である。匣剣生塵、寒濤目雪、客子光陰、英雄短気などの句は、近ごろの数年、またまったく同じ写真のようだ。ああ、残念。